添嶋文庫・一

幻灯機

『sunless』

ゆるくまとわりついた熱をふりはらうように体を右に左に
ゆうべからつづく夢はとうに捨てたまさに夢の話
今ごろになってこんなところでひとを困らせてなんになる
声をはりあげて抗議してみたところで変化などあるはずもなく
規則的なノイズが不規則なずれとともにそろりそろりとヴォリュームを上げてゆく

電話をとったのは日付変更線をこえたあたり
抑揚のない声は非礼をわびていてもすこしも反省しているふうでなく
ああ、そうか、となにか一言二言いったような気もするが
線をひきちぎるような音を立てて耳は静寂をとりもどした

不機嫌なままでも夜は越せる
ほんの少し物騒な幻覚と
ひきもどされた現実で吐き気をがまんすれば
（そうして口の中でいつか彼がいっていたように
大丈夫、大丈夫とくりかえすことができれば）

目の前の映像に疑問を持つころ
ノイズがまたそろりそろりとヴォリュームを上げ
まだ熱を持たない風に舞う布から逃げてきた光が
僕を意地の悪そうな顔をして起こすのだ

（これから始まるのは新しい、希望に満ちた）

『幻灯機（あるいは自由落下の法則）』

何年か前に
衝動的に窓から飛び降りて死んだひとがいるのだそうだ
その人の机をかたづけてしまうときまってよくないことが起こる
だからいつまでたっても誰も使うことのない机がここに残されているのだ

という
学校の七不思議からも仲間外れにされそうな噂があって
だけどもどうにかするつもりのないひとばかりがそろっているものだから
その死んでしまったひとのかわりに机が生き永らえてしまっている
そしてそれはいま僕の座席の横にある

実際のところ
飛び降りたのが誰でなぜそうしなければならなかったのかなんてことは
誰も知るはずもなく（だいたいそれがいつのことかさえも知らない）
ここにこうして一人分の座席を確保してあるのだという事実だけが必要であるみたいに
今日も一度も動かされることなくいつもの位置に机は存在する

ただ
あの連中はここには近づこうとはしない
僕の場所もここからかわることはないだろう
誰かがいっていたように僕はいけにえとしてここにいるのかもしれない
（あるいはいけにえとしか機能させてもらえないとも言える）
彼らがいうようにだから今日も何事もなく一日が過ぎてゆく
僕はまだ一言も言葉を発していない
昨日もそうだったように明日もそうなのだろう

授業をうけていて暇もなにもないのだけれど

なんとなく思いたって僕は窓の外に体を置いてみる

ほんの一瞬のことだったので落ち着いて考えることもあまりできないけれど
たぶんあのひとも似たようなものだったのだろう
始まりが誰だったかはどうでもよくて時々同じようなことが起きる
そして噂と座席だけが残りぐるりとすべてがつながって
おもちゃの幻灯機のように何度も何度も繰り返されてゆくのだ
飽きることなく延々と

『隔たり』

いまここでさよなら、といってしまえばもう二度と会うこともないんだろうなと思う
数ヶ月ぶりに天気がわかるような時間に外に出て
しかもすべてを遮断してしまいたい気分の僕にまとわりつく空気と戦うようにして
呼吸の仕方すら怪しい状態で現れた僕を見て
君はあきらめたような顔をそれ以上どうにも変えようとせずに
入った店で黙々と食事をとって
そして
ゲームセンターの騒音に取り残されてしまっていた
（どうやって笑うのかも忘れてしまったね）
このままドライブとかなんとかいって町を回ることが出来ればまだましなのかもしれないけれど
いまの僕にはそれもできなくて黙って君を家まで送ることだけ考えてた

今日した約束はふたつみっつ　たぶんそれも守られることは永久にないだろう
三年も一緒にいて早くひとりになりたいと思うようになるなんて考えたこともなくて
実際そういう状況になってみたら君はいつも自分のことばかりで
「二人でいるよりも仕事の方が大事なんですか」といわれても不思議じゃなかったし
理不尽なケンカも楽しむ余裕があっただろう
もう少し前だったら　せめてもう半年前なら
そうして一緒にいようとすればするほど別のものに拘束されてゆくことを自覚し出した頃には
僕たちはもう同じところに戻っては来られなくなった

別に嫌いになったわけじゃなくて
飽きてしまったわけじゃなくて
人前に出ることが辛いと思っていたときに君が何もしてくれなかったことを責めるのは
それは僕のわがままなんだろうか　僕のせいだと君はいってくれただろうか

君に言うわけでもなく声に出た言葉を
聞こえたのか聞こえてないのか背中に顔を押しつけてきたけれど
一度だって目をあわせようとはしなかった
なにもいってはこなかった
たぶんそれは君の答えだった

家の前で車を停めたときにシートベルトを外す手が躊躇していたように見えた
いまここでさよならといってしまえばもう二度と会うことはないのだろう
例えばもう会えないといえばよかったのかもしれないけれど
僕たちは（少なくとも僕は）違う言葉を探していた
車から降りた君は最後まで一言もなく　手を振ることもせずに背中を向けた
まばたきの間にサイドミラーには君の姿が映らなくなった
僕はひどく難しい顔をしていただろう
今日したふたつみっつの約束は未来永劫保留されることになった
だけど　ほんの少しほっとしたのも確かなことだった

著者：添嶋　譲　@literaryace
発行者：空想少年はテキストデータの夢を見るか？
http://literaryace.littlestar.jp/
literaryace@ko.littlestar.jp
発行日：二〇〇九年一二月六日　初版一刷
二〇一〇年一二月五日　初版二刷
※8P　折本メーカー（http://8p.dip.jp/）で作りました。多謝。